

**「宮沢賢治ベスト3」を作る活動を通して、
物語の世界を味わい、宮沢賢治作品の魅力に気づかせる。**

第5学年2組 国語学習指導案

指導者 夏井 駿

1. 単元名 『宮沢賢治ベスト3を決めよう!』
2. 学習材 『雪わたり』(教育出版 ひろがる言葉 5年下)
その他宮沢賢治作品

3. 単元について

(1) 本単元でつきたい力

本単元では、主に、小学校学習指導要領・国語〔第5学年及び第6学年〕の「C 読むこと」における以下の能力を身に付けさせることをねらいとしている。

C 読むこと

- | | |
|-------|--|
| 内容 | イ 登場人物の相互関係や心情などについて、描写を基に捉えること。
エ 人物像や物語などの全体像を具体的に想像したり、表現の効果を考えたりすること。
オ 文章を読んでまとめた意見や感想を共有し、自分の考えを広げること。 |
| 言語活動例 | イ 詩や物語、伝記などを読み、内容を説明したり、自分の生き方などについて考えたことを伝え合ったりする活動。 |

本単元では宮沢賢治作品を多読し、その中でお気に入りの作品を選び、『宮沢賢治ベスト3』というアンソロジーを編む。さらに、作品の魅力や自分が読んで感じたことが読み手に伝わるように文章にして紹介していく。

これらの学習を通して、登場人物の関わりを捉えることや、作品の魅力を紹介する文章を書く力を身に付けること、作品の読みや魅力を文章に書くことをきっかけに、子どもたち一人一人の読書の世界を広げていくことをねらっている。

(2) 本単元で行う言語活動

本単元で行う言語活動は、宮沢賢治の童話からお気に入りの作品を選び、自分だけの『宮沢賢治ベスト3』というアンソロジーを編む活動である。これは、小学校学習指導要領「C 読むこと」における言語活動例の「イ 詩や物語、伝記などを読み、内容を説明したり、自分の生き方などについて考えたことを伝え合ったりする活動」を踏まえている。

『宮沢賢治ベスト3』とは、子どもたちが選んだ宮沢賢治の童話3作品をアンソロジーにしたものである。①表紙②目次③推薦文④物語の本文⑤あとがきの5つの構成からなっており、各作品についての推薦文と物語の本文は3位から順番にカウントダウン形式で収録されている。

本単元では、教師が作成した『宮沢賢治ベスト3』のモデルに出合わせ、単元のゴールまでの見通しをもたせる。そして、並行読書を通して見つけたお気に入りの賢治作品をアンソロジーにする活動へとつなげていく。アンソロジーを編むにあたり、作品に対する自分の読みや魅力を伝えるための文章の書き方を学ぶとともに、完成した「宮沢賢治ベスト3」を友達と読み合い、互いの意見や感想の違いを明らかにしたり、互いの意見や感想のよさを認め合ったりすることで、作品に対する自分の考えをさらに広げられるようにしたい。

(3). 学習材について

『雪わたり』は、1921年(大正10年)の12月と翌年の1月に「愛国婦人」誌に掲載された宮沢賢治のデビュー作である。賢治は本作で5円の原稿料を得たが、これは生涯に賢治が手にした唯一の原稿料であったと伝えられている。(出典：Wikipedia)

雪がすっかりこおって大理石よりもかたくなったある日、四郎とかん子は小さな雪ぐつをはいて野原に出る。森の近くまで来て「かた雪こんこ、しみ雪こんこ。きつねの子あ、よめい、ほしい、ほしい」と歌っていると本当に白いきつねの子がやってくる。子ぎつねの紺三郎がおもしろそうに二人にきびだんごをすすめるが、かん子がつい「きつねこんこんきつねの子、きつねのだんごはうさのくそ」と失言してしまう。それを聞いた紺三郎は、「きつねが人をだます、なんてことは全くの無実の罪であり、人間の大人がついたうそであると主張する。さらに紺三郎は、きつねについてもっと知ってもらおうと、この次の雪のこおった月夜の晩に行われる幻灯会に招待するため、二人に入場券を渡すのだった。

雪がかたくこおった十五夜、四郎は紺三郎との約束を思い出し、かん子と二人で幻灯会が行われる森に向かう。紺三郎は、二人に挨拶をすると、まもなく開会の辞を述べ、幻灯会がはじまる。酔っ払った大人の太右衛門と清作が悪いものとも知らずにそれを食べている写真が幻灯で映し出されたあと、休み時間にかわいらしいきつねの女の子がきびだんごを乗せた皿を二つ持ってくる。すっかり弱ってしまった四郎だったが、紺三郎が自分たちをだますはずがないと決心し、二人はきびだんごを食べる。きびだんごはほっぺたが落ちそうなほどに美味しく、きつねたちは信用してもらえたことに大喜びしておどり上がる。その様子を見た四郎もかん子も、あまりにうれしくて涙がこぼれた。後半の幻灯も終わった後、紺三郎は四郎とかん子に信じてもらえたことに触れ、きつねたちは誠実さによって今までの悪い評判を消し去るだろうという閉会の辞を述べ、幻灯会は終了する。きつねたちにたくさんのおみやげをもらった二人は、森を出て野原に戻って行った。

『雪わたり』は、人間の四郎とかん子、子ぎつねの紺三郎の両者が織りなす歌のかけ合いが、魅力の一つになっている。また、幻灯会での少し背伸びをしたような紺三郎の「開(閉)会の辞」や、幻灯を見ながらのみんなの歌もリズムよく愉快地に描かれていて、それらの表現の魅力を中心に言葉を読んでいきたい教材である。

宮沢賢治の童話は、教科書教材にも扱われている『雪わたり』『注文の多い料理店』『やまなし』を代表に、基本的に短編小説が多く、挿絵も相まって読んだときに幻想的な作品世界を味わうことができる。童話と言っても決して幼い子ども向けの作品ではなく、読み手によって多様な考えが出るような人間の愚かしさや浅ましさが浮き彫りになる話も数多くあり、高学年の子どもたちの心に響く内容となっている。

また、『雪わたり』をはじめ宮沢賢治の童話には「リズムのあるくり返しの表現」「たとえを使った情景描写」などの優れた表現が多く散りばめられている。

作品名	特徴的な文章表現
雪わたり	四郎もかん子も、すっかりつりこまれて、もうきつねと一緒におどっています。キック、キック、トントン。キック、キック、トントン。キック、キック、トントントン。
風の又三郎	どっどど どどうど どどうど どどう 青いくるみも吹き飛ばせ すっばいかりんも吹き飛ばせ どっどど どどうど どどうど どどう
やまなし	二足の蟹の子供らが青じろい水の底で話していました。 「クラムボンはわらったよ。」「クラムボンのかぶかぶわらったよ。」
カイロ団長	そのうちあまがえるは、だんだん酔いがまわって来て、あっちでもこっちでも、キーイキーイといびきをかいて寝てしまいました。
注文の多い料理店	「なんでも構わないから、早くタンタアーンと、やってみたいものだなあ。」
なめとこ山の熊	小十郎は真っ青なつるつるした空を見あげてそれから孫たちの方を向いて「行ってくるぢやい。」と言った。

「オノマトペの達人」とも言われる賢治の特徴的な文章表現に着目することで、賢治の創造力の豊かさや作品の面白さを感じられるようにしたい。多くの賢治作品にふれ、それらの魅力を文章で伝える体験を通して、賢治の作品世界を子どもたちに大いに味わわせていきたい。

(4) 子どもの実態(男子17名 女子15名 計32名)

文学的な文章の学習においては、4月に『いつか、大切なところ』の学習で「作品の心」にせまるための問いを考えた。個人→グループ→クラスの順で対話をくり返し、個人の問いを学級全体の問いへと磨き上げていく対話的な活動を行うことで、子どもが作品を主体的に読み、互いの考えを共有し共通点や相違点を明らかにしながら、考えを深めたり広げたりすることができた。

『大造じいさんとがん』の学習では、大造じいさんが残雪と「堂々」と戦い合うための新しい作戦の提案をするために、残雪に対する大造じいさんの見方・考え方が変化している文を探したり、その行動に対しての自分の考えを伝え合ったりする活動を行った。これらの学習を通して、大造じいさんの心情の変化を読み取り、物語の読みをより深めていくことができ、人物像や物語の全体像を具体的に想像したり、表現の効果について考えたりすることができた。提案書を書く活動では、今までの読みを振り返りながら、狩人である大造じいさんが考える「ひきょう」とはどのようなものなのかについて話し合い、堂々と戦うための作戦を考えた。「今までの作戦よりも優れているか。」「その作戦はなぜひきょうではないのか。」を明らかにしながら、自分の提案のよさをアピールするためのプレゼンテーションをグループごとに行った。

以上の学習内容からも分かるように、子どもたちは様々な言語活動を通して文学的な文章を読んできている。一方で、読書量や読む内容においては個人差があり、読書の幅を広げられていないという課題がある。

子どもの読書活動は、言葉を学び、感性を磨き、表現力を高め、創造力を豊かなものにし、人生をより深く生きる力を身に付けていく上で欠かせないものである。このような読書で培われる力を育むためにも、本單元では、多くの宮沢賢治作品を読んだり、子どもたちそれぞれが感じた作品に対する読みについて文章に表したり、互いに意見や感想を交流したりする活動を通して、自分自身の読みの広がりを生み出すと同時に、宮沢賢治作品の世界観や表現の奥深さについて理解を深め、様々な文学作品に出会うことの魅力に気づかせていきたい。

(5) 指導観

〔見出す〕

□本時(本單元等)の目標(めあて・ねらい)を児童に明示する。

①学習の見通しをもたせ、主体的に学習に取り組ませるために、子どもたちと単元計画を作成する。

本単元の導入では、教師が作成した『宮沢賢治ベスト3』を提示し、単元のゴールを描くとともに学習意欲を喚起する。そして、「自分のおすすめする賢治作品を友達に伝えるために、宮沢賢治ベスト3を選ぶ」という単元のゴールを共有する。

また、『宮沢賢治ベスト3』のモデル分析を行うことで、子どもは『宮沢賢治ベスト3』が5つの内容で構成されていることを知る。そうすることで、これから子どもたちが賢治作品を読む際の目的意識・相手意識をもたせていく。さらに、『宮沢賢治ベスト3』はどのような順番で作っていくのが良いかを考えさせ、子どもたちと一緒に学習計画を立てることで単元全体の見通しをもたせたい。

〔自分で取り組む〕

□児童が自分の考えを形成したり、思いや考えを基に創造したりする時間を確保する。

②『宮沢賢治ベスト3』を作りながら、選定した賢治作品への読みを深めていく。

『宮沢賢治ベスト3』は、次の内容から構成される。

①表紙 ②目次 ③推薦文 ④物語の本文 ⑤あとがき

子どもたちは、『宮沢賢治ベスト3』をつくるために賢治作品を多読していく。実態に応じて並行読書を進めら

れるように、児童用の絵本や読み聞かせのCDも用意し、全員が宮沢賢治作品に親しむことができるようにする。

推薦文については、教師モデルとしてさまざまな内容の文例を用意し、工夫された推薦文の書き方を考えさせる。推薦の内容はあらすじの紹介にとどまらず、表現の仕方や描写の仕方、話の展開の面白さなどに目を向けさせ、その作品の魅力や自分の思いを書き表せるようにしたい。あとがきでは、選定した3つの作品を総合して自分なりの賢治作品の魅力（宮沢賢治論）について考える。『宮沢賢治ベスト3』を作成する過程で気づいた作品の特徴や魅力を書き表すことで、賢治作品の面白さ、奥深さを改めて感じさせたい。また、レイアウトにも着目させ、各自が内容を工夫して書くことができるように学習を進めていきたい。

〔広げ深める〕

□児童が自分の考えを伝える場面を設定する。

□児童が多様な考えを理解できるように、互いに学び合う場面を設定する。

③『宮沢賢治ベスト3』を互いに読み合い、意見や感想を交流することで読みを深め、読書の幅を広げる。

互いの作品に対する推薦文を読み合い、意見や感想を交流する際には、カンファレンスの手法を用いる。カンファレンスでは、質問を通して友達の「宮沢賢治ベスト3」のよさを見つけるとともに、自分の読みと友達の読みを比べたり、作品の魅力伝えるためにどんな工夫をしたのかを話し合わせたりする。同じ質問項目でも、同じ作品を選んでいるかそうでないかでフリートーク等の話題も変化していくため、その都度どんな話をしたのか全体で共有することで、その後のカンファレンスがより充実したものになるよう手助けをしていきたい。カンファレンスの後は、友達との話し合いを経て感じた宮沢賢治作品の魅力全体で共有することで、自分では気がつかなかった賢治作品の魅力改めて知ることができるようにしたい。

4. 単元の目標

【知識・技能】・・・㊦

○「宮沢賢治ベスト3」をつくる活動を通して賢治作品の世界を味わうとともに、賢治作品の魅力について気づくことができる。(1(3)オ)

【思考・判断・表現】・・・㊧

○人物像や物語の全体像を具体的に想像したり、表現の効果を考えたりすることができる。(2C(1)エ)

○宮沢賢治作品を読んだ感想を友達と交流し、賢治作品への考えを広げることができる。(2C(1)カ)

【主体的に学習に取り組む態度】・・・㊨

○見通しをもち、宮沢賢治作品の魅力や自分の考えを伝えるために、「宮沢賢治ベスト3」作りに粘り強く取り組んでいる。

○宮沢賢治作品を幅広く読むことの楽しさを実感している。

5. 全体指導計画

	時	主な学習活動	○教師の留意点 ☆評価(方法)
第1次	1	単元のゴールをつかみ、見通しをもつ。 ・教師自作の「宮沢賢治ベスト3」のモデルを読み、興味・関心をもつ。 ・学習計画を立てる。	○教師自作の「宮沢賢治ベスト3」を配り、学習の見通しをもたせる。 ☆これからの学習に見通しをもち、学習への意欲を高めている。(㊨態度・発言)
	2	『雪渡り』と出会う。 ・初発の感想をノートに書く。 ・わからない言葉について調べたり、確認したりする。	○着語読みにより、作品世界に浸らせる。 ☆物語のおおまかな内容を理解し、楽しんで読もうとしている。(㊧発言・ノート)

	3	『雪渡り』の魅力について考える。 ・感想を交流し、『雪渡り』の魅力について話し合う。	○疑問に思ったことや不思議に思ったことなどを肯定的に受け取り、多様な感想交流になるようにする。 ☆物語の魅力について、自分の思いや考えを語っている。(㊟発言・ノート)	
第2次	4	推薦する作品を選ぶために、宮沢賢治作品を読む。	○宮沢賢治作品の絵本やマンガなどを用意し、子ども一人一人の実態に合わせて、各々が読書に取り組めるようにする。	宮沢賢治作品の並行読書↓
	5	・「宮沢賢治ベスト3」に収録したい作品を選ぶために、賢治作品を多読する。	○作品を読んで疑問に思ったことや感想については、読書カードに随時メモを取るように声をかける。	
	6	・読んだ感想やおすすめ度を読書カードに記録する。	☆宮沢賢治作品を読み進め、お気に入りの作品を選ぼうとしている。(㊟態度・ノート)	
	7	作品例を基に推薦文の書き方について話し合う。 ・教師自作の推薦文を読み、読んでみたくなるような工夫しているところを話し合う。 ・話し合いを基に、推薦文の書き方を決める。	○それぞれの作品例で工夫しているところを話し合い、作品のよさを伝えるための表現方法や文章内容について考えさせる。 ○人をひきつける書きぶりや視覚的な効果に気づかせ、その作品の魅力伝える上で最も良い推薦文の書き方を考えさせる。 ☆推薦文の特徴について理解し、自分の考えをもつことができている。(㊟発言・ノート)	
	8	紹介の仕方を工夫しながら推薦文を書く。 ・相手に伝わるように、構成や言葉を工夫し、推薦文を書く。	○自力で書くことが難しい子どもには、教師自作のモデルを例として見せたり、教師と会話をしながら話の展開を整理させたりすることで、推薦文の書き方のイメージをもたせる。 ☆紹介の仕方を工夫しながら推薦文を書いている。(㊟宮沢賢治ベスト3)	
	9			
	10			
	11	あとがきを書く ・宮沢賢治作品を多読して気づいたことや、「宮沢賢治ベスト3」を編集した感想をあとがきに書く。	○宮沢賢治作品を多読して気づいたことや、3作品を収録した自分の思い、「宮沢賢治ベスト3」を編集してみて感じたことなどを書くように声をかける。 ☆これまでの学習を振り返りながら、賢治に対しての自分の考えをあとがきに書いている。(㊟宮沢賢治ベスト3)	
	12	「宮沢賢治作品交流会」を開き、感想を交流し合う。 ・「宮沢賢治ベスト3」を読み合い、感想を交流する。	○「宮沢賢治ベスト3」を読み合い、作品のよさを見つけさせる。 ○工夫をして推薦する文章が書けたか、友達の文章を読んでどうだったか感想をもたせる。 ☆友達と宮沢賢治ベスト3を読み合い、宮沢賢治作品の魅力に気がついている。 (㊟態度・発言・ノート)	

6. 本時の指導（12/12）

(1) 目標

宮沢賢治作品を読んだ感想を友達と交流し、作品に対する感想や魅力を共有することで、賢治作品への考えを広げることができる。（【思考力・判断力・表現力】C（1）カ）

(2) 展開

時配	学習活動と内容	○教師の留意点 ☆評価（方法）
2	1. 学習問題を確認する。 宮沢賢治ベスト3を読み合い、宮沢賢治作品のみ力を語り合おう。	○単元計画を掲示し、本時の学習問題について確認できるようにする。
5	2. カンファレンスの流れを確認する。 【カンファレンスの質問項目】 ①どうして（ ）を選んだの？ ②（ ）の魅力って何？ ③自分の推薦文のオススメポイントは？ ④宮沢賢治作品の魅力って何？	○質問項目①②で取り上げるのは、宮沢賢治ベスト3内の1位の作品とする。また、フリートーク等で他の作品を取り上げて話をするのは良いことを伝える。
25	3. カンファレンスを行う。 ・片方の質問が終わったら質問者を交代する。 ・交互に質問を終えたらフリートークを行う。	○自分の考えをより明確にもたせるために、3人以上と話せるようにする。 ○カンファレンスの合間にフリートークで出た話題を全体で共有し、それ以降のフリートークの内容を考える手助けをする。
10	4. カンファレンスで友達と感想を伝え合ったことについて振り返り、全体で共有をする。 ○友達と宮沢賢治ベスト3を読み合ってみてどうでしたか。 ・自分と同じ作品を選んでいたら、選んだ理由が違う友達を見つけました。 ・ベスト3に選んでいない作品も読み直したくなりました。 ・宮沢賢治の作品のよさが改めてわかりました。 ○宮沢賢治作品の魅力はどんなところですか。 ・独特な言葉の使い方が面白いところ。 ・リズムの良い言葉があって、声に出して読むと楽しいところ。 ・読んでいて不思議に思うところがたくさんあるところ。	○カンファレンスで話した内容を全体で共有することで、選んだ作品が同じでも、人によって魅力を感じる部分は違うことに気づかせる。どの部分が友達と考えが違うのか、同じように感じたのはどの部分なのかを詳しく聞き出すことで、共有を深める手立てとする。 ○様々な作品のよさを全体で共有することで、宮沢賢治作品には多くの魅力があることに気づかせるとともに、今後の読書活動の充実につなげさせる。 ○自己評価や相互評価を行うことで、書いてよかったという成就感を味わわせる。 ☆友達と宮沢賢治ベスト3を読み合い、宮沢賢治作品の魅力に気がついている。 （◎態度・発言・ノート）
3	5. 国語日記を書く。	